

中村俊定文庫
文庫 18
265



寬保二

飲
酒
菽
子

馬
是

変化自在を特異しくこの道
耳通す。其のその園は好
よ海おとすやま布
をすめし一集のり
むきとと那に

涯山子

馬光叙



俳諧殺うらひ

春之部

曇華春

そのやせな梅乃むらや月夜 馬光
山里もけの雲と氷雪解か 朶雲
志く魚や舞の志くふもる 白芥
菽く毛紙振ふく雉子の不ろ 一蓑
冬遊ひいさつうふ喜乃すく 朝霞
田楽乃朶朶や味嗜りちれ 花卜

とこ糸山 越しとそ



やま風やうすこをとけて仲の波 竹阿
そり折く香万歌くやみうさぬ 鬼山
長采ゆる空のおもやおきの浪 辛葉
ぬう空のひくう負てやぬれむめ 扉夕
春風の香吹くげくおろけ月 浙江
志川うさふをくーい動く田州 芙蓉
ろらにり紙くーして下る重花 思玄
買ふく州鐘の少くさよをはく 許人
天人一と次小神ういりのり 文吏

草をさゆく日に酔ふ娘子れ日 馬光
玉味晴の朝もつゝとひや梅乃 栢子
早乙女乃昔成おのひやるゆり 霍錢
おうりりや志つあうり女の物 五寛
はくくら乃く市川流一つ 左峰
疱瘡を志すおくちも筆うれ 素蒿
於女ののきくも居らき原 素舟
やうぬきやあうさくおむの 栢徳

けしきも世にひらけりて三日乃月 松堂
 肝志を流きて通れつてもめ 近史
 きおほくろり腸もも通するはては 野道
 骨折をそめて落さひもろく 銅臭
 知子りくや妹さく 津記真の院 湖南
 この年乃くれよ灯をうけつてもき 謙守
 初めむすや夢も梅小肩くるは 孤村
 ありーろや愛を嘘乃淡とて紙 陽平
 実神小咲く見えもろく 眞此兄 如考

標くく振ひ出さされはこわく 白精
 長宗さや海もぬ織のうしろ 隅潮
 永乃日く何を田山一のよえあり 眉上
 本れ志く哉吾のみふとや友乃む 琴枝
 其女のよ夜り流るや月の傘 砕石
 佐保娘乃系ありく乃柳くれ 露兆
 山くれぬ安哉のと次音解る 泉
 大名を又くけく返んつても 魯舟
 佛くさぬ氣もなれば波もさく 杞

古川や角くびの橋も〜 岨嵐
順礼の火渡りもや山は〜 琴志
是も重乃化か〜 八もぬうやま極 維石
青海苔乃もろ〜 吹やゆれ空 平武
短冊と屋ら〜 や狹路の料理方 海阜
日を山一折らんてりも〜 互互
宇らひその熱いもの吹ぬ者なる之
際道く〜 宇一セり〜 芋谷
ちよ〜 辰乃中や桶師 町 其民

静かなるうらや柳乃おあひ 雲堂
銚子や庭の焼籠のともれつら 南園
宇らひもや舟も細谷のしゑ 現法
吹風う巻屋の店も柳 中車
長靴目を鳴らん〜 あそぶ 柳 秋

短哥行

猿のしゑ園―も心川うやう極 馬光
 楯をももゑれて忘乃あゝう 文史
 あゝ海より思れ舞舞の糸ゆかに 花卜
 今の正すいのらよこらわう 四柱
 曉の菊故月ねうゝ又すうら色 雲堂
 疎れりもする社家秋葉 銅魚
 鏡之入鏡の救うはくちりきて 南西
 降川照つよ追ひうす了 白菘

あまふとのもてあ―坂も年々言 琴志
 筒うううとけ伊勢乃か細尾 五寛
 ころもに花の新地志二三軒 如考
 世りあゝれ乃お麻呂西 維石
 つくららもま供の礼をけりしり 研石
 左方清つゝものを楯のまゝり志 海阜
 よら―よはあやけも待ねらら 紫泉
 まゝ葉もり葉張海ぢもき月 松堂
 さううれと烏も側りおねひ 隅潮

まゝに母一ひきよの占る、
木植るちきましく乃管すれ
やもふく越後海道
お金の肩ふとてり互^之やる
もつひすはる筈のうす付
を箱乃うつう形此嘆こる道
麦も縁る二月の元
許人
近叟
思玄

彫物了まきれ込くつそあが
菽入乃引起さましく物湯の
まゝ魚や網を介ハれる月
とあさくや川水折る柳の
降るあつ^にきく^て啼^はむ
空らひあ乃^て急流^はむむ算^が
村くく^り波のきく^く壁^の
あろろ^の宿と^うあ^てぬ^らい^こ松
張^の上^と越^へゆ^くこ^とあ^け
伎車
唯九
菊堂
笠帯
飯月
如貞
石樹
麻山
龜山

角落く庵を淋きばしめは 徒如
あうくけて秋もゆくりやる葉 閑鳥
神さひ 地ひの穴や由阿り 梅星
むのの影あはらぬもて忘白^白 信川
ふさくらあしき出れ湖の予 午町
まのひり月夜を足してむえが 練戸
菖柳や茶屋のうかうぬきへは 笈水
わくまといふぢれむくさやまの原 長清
奔ひ込く衣桁よとさる燕が 貞宇

風やして一息をさるれ柳の柳 況李
鼻つきり梅乃まらひや竹格子 園千
志く魚やさるりぬく^ぬぬの浪 中常
馬さへす忽りア^アぬ^ぬか^かき^き 秋彦
張りきくの依り白く忘乃梅 玄彦
まを交へ川のこもくやぬらの毛 松反
志川くさよ柳も傳ふあめれ音 千亮
引けり^り新ましく伸を振るぬ 千隆
永の日のまもものひらや露のそ 貫玉

美乃香枝多々みはくし屏風板女花柳
 年寄も陀もかきむる彼居古勇
 美草乃く入城く女や知子の夢女栞庭
 常乃志こりーまてやん兜の字 仙阜
 八おや人ももろく山らく良 集雅
 風琴ーその口口をさやうさ九ら 虎十
 其面や志めやうふく秋り素岳
 ぼくらの姿又さきや海う水 素尺
 又通り関えー句く

ぬくくや鳥も志ろき美乃やま甲斐中三島里
 咲垣く山門他ーくまろり 栞阜
 羽子板乃くくーやとらら山屋敷三浦 芳祭
 琴の音よ味成つるくや其乃每日 几水
 志き次く栞庭定日のさむさ日 羽長
 う川くま少くつを出水の帆日 船栞 一流
 其風く舞ひり考の穴日 廣一 琴嶺
 賣雛乃おろくもつく隣日 あり 栞里
 う紀忘ふあきてう猫乃屋つ日 下 英風

青柳や飯糰く忘の爲くりり錦田山青
苗代や核姪う以りれ存ひる一久江其友
長宗さや流きよふむく柳大谷田對 素瘡
常や桃乃葉もも下屋三浦青汀

夏之部

宇らひあのと及まぬを鄭公馬光
面う月よあひ吃らんを守白芥
亦の子紙うやむ瓜のこゝを於霞
相れ乃肩く風うれあハせり父史
恙か減の日にく移れ四月小靡夕
夕風や際うあけてけー乃益花卜
日さうりを際え入ほふ寂う那黄菱
我候減月も笑ふや故屋乃田浙江

古舟を波しのろくや仲あま守 弁阿
取忌きむむ信や夜屋のりんこ多 一蓑
りくくもあちけて走る水鶴成 兔山
灌佛や芥子もは日小刺しめ 芳隣
ゆふ顔の花やわらむく杵杵音 辛葉
沢深やあちり通原葉のとう包 許人
紫蘇蓼乃錦ちりすや冷汁 思玄
咲くよ包物の志のりや花あまひ 朶雲

入栴あけ紙伸ししてまや境々あり 馬光
おくこ記人もあちりく 捨り耶 栢子
夕々ねや代さきさきれ 古まこれ 栴位
ふくくくや何をちりくに砂川原 又寛
待恵成まきつ紙てりくくあ鶴成 素芳
風くくを奢りを信ちりく金河ふた 圭民
ねる照つれ日紙休せして五月あめ 竹野
きくもをくくさくさくり清水く子 左寧
くく雲をこちきてまきや 鯉糸 隅湖

辞世

我年一乃くく山一以う夏此悼^{主人}来と
 凌宵や名もかくこれぬ門うまへ 白精
 大木の皮もうくく せいの勢 銅魚
 吾迹乃仕方も悟一 朽此隈 野尻
 了急よ水残おきてけやまつ鯉 湖南
 ばまついゝ夢あり 雲のりとも 孤村
 うつむいゝくねを麻くぬ音金のむ 陽平
 豆腐よを安いゝ海一とくろえん 口花

山駕簀や押のきらまぬ際の夢 寺嵐
 のひ出てハ伸おれまの暮と夜 謙守
 ういよまを風も透尺やま 簾 醉石
 松うせ乃泣うハとくやんこ智 病兆
 おくくや桐の葉をまもり 釣瓶 琴志
 草も一を脱く捨るあ川さか 碓石
 せふ日乃う思ふらさ一 悼れ急 近叟
 むくせいの梯子のぬるや富士海 松堂
 ぬるるく今物もあさ麻やら 柴山 春枝

志のひつゝ人の我ありあたまばさの 家隆に
よまれぬやりのぬらうも川はつ

三賢の秀奇乃ちあつてふらひきむした
ハあゝぬやれやみ川よつ乃河を越向
うらゝふの

少のみつははと々々きぬ初葉 馬光
旅くし藤く二川こつはつ段屋の穴 朶雲
瀉をとり二川みつよ流痕すー 白芥
ぬらうと川よつとてけて芥子村を 胡荽
二はく川はらふよと鏡乃新涼ー 弁阿

飯粒をあらうあて寺ハツんこ馬 馬光
叙的くも光れ氣を飛ぶ管の 里山
あ祭るも冬半ゆゑ寺と心も色次 午町
さゝ流る月を品して破涼ー 漢水
隈くくく臭のたあり蓮乃華 栂待
冷めやととあうありやらんを 七満
東阿しを力ぬめーやと年竹 笈水
やう旭の折やー啼や豆乃茶 山妻
銜口の考致ちうーやふも通 笠京

昔アノよと起してまゝ此の鶴も 瓜田
唄りきく牛もうらうら田植う耶 梅阜
うらうら八名洲ぬらうら此言句うれ 金洞
きらむや登麻の爰り里下り 琴書
思こころさうこ出され せ乃孝 沉李
瓮の祭うむうー志進次をう瓜 登川
山風をうんてハすてれ熾う耶 集雅
うらや小隠右の栞成をうてきり 席池
や耶ちハ様よまきれて子 規 羽長

星ひし川アノ身も啼う蜀魂 千亮
卯のむ乃垣のうきやえ結き 仙臈
夏山うり瓜成はきうや耶 公 爰瓜
七厘よ舛ハ岸あきー 國うれ 朱山
舟の子やむいもこせぬ塚の神 芦沙
河風うられちうらうられうら 芦扇
巻くれくち乃光アヤや萱忠志 布白
蓮乃葉や佛くう詠の屋うらき 風子
川物やう詠もくう 雜魚一川 可及

金瓶の又り色ぬ山やま乃み祿 夜川
 おあふ紀一極も敷く牡丹の 未尺
 夫婦して門を廻さけれ涼む 浅川

 予予受齋庵一日是雨日活若七十年供是百
 四十や東坡居士の姿情より又是と執あり然
 合ん共り急を守忙中に居てその致さくしれ
 一生の世生せとも一日乃穢婦ともうの折その時
 乃氣持なるを

玉川一紀角振着せかつつ 白芥

秋之節

葬やうさうれ高乃漏溜ところ 馬光
 味乃其心秋う手栢や夜うし 一蓑
 あさあや又清して衣る子習子 乍阿
 橋左や對ううりうり 花卜
 沖の波月をそあをさうおろり 危山
 穂くくく

秋夕や縁ひ弦らきく袖の浦 扉夕
 思う少色をやつまも思はん好れ月 胡底

あこ芳やちきても汲り水々々 糸雲
勿許とく川並一 相乃一匹衣 浙江
山秀一息もつらきね 思立
枘ぬ^柿や枘^柿より 黄菱

高回^て

入時を日とちちむく 珠人
海一す川流してりや 文史
あきまぬ中に 芳隣
稿の香や味りて 辛葉

三月十日つらく 白芥

涅槃經曰如衆育之 模象也

いつれ^て海を

きふても 馬先
雲乃神^てけて 銅魚
込く^て乃^て 霍談
名月や 栢子
女帝^を石の地^を 如考
あつ^てと^てけ^て 州秋

月影沈まきしとや磯の波 露光
染つらんまやうら乃女蒲團 酸石
世の秋たふとく強持ぬ瓢下 孤村
草花の散りけけおむし乃夢 松也
るつゝのぬたのおもなく勢 陽平
錦衣洗ふ流まや夢乃雲 栞往栞
衣る川流もせりや船旅翁 松堂
揖々ゆふ声や音方るの上徳舟 芋谷
稻舂やこふ日御もいそぐく 豆反

伊達をうしてねとせうまゐるお盛 左率
少く風張存ひく麻々や鳴子川 白精
稲妻や宝伝く乃雨まん切 満湖
あさくぬや星々袋の口がま 湖南
御の頁のきりふもあゝぬ本堂が 口托
いふまを信りく度まや草代前 未草
送る火やい涙もく乃家の教七人 文蘭
文奈くうらのの口号うらり城今変り
まのまゝく眞魂を慰む
日もくれぬ聖具を乃風の音 馬光

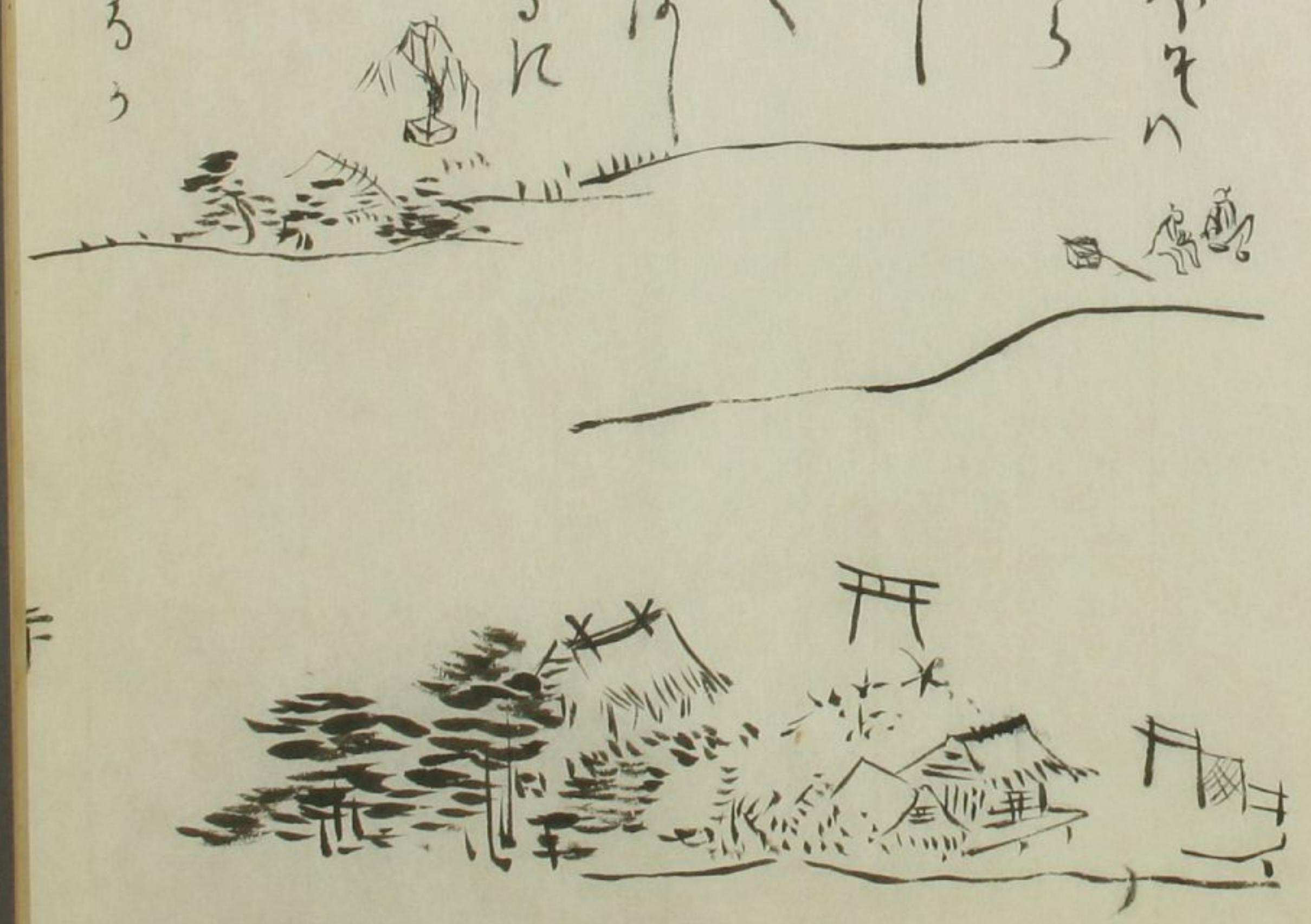
文りや地勢も高麗立安青民
香室ろくおもて紙足せきうる地勢
斤すく小甲友り紀架の抄子小
乃乃徳の取意よハ情一ハ秋の屯
山雀やちのくぶも紙つくりり
約撞へち紙出ん草のお淋一
松風もんっりりや今物忠秋
穂乃神もちきれて後の月
山伏の祈りありや新雨時
維石

い子片りよお合をりり旅治の槌 奇嵐
七夕り氣のけりり曇り風 五寛
身を振ふるもさすよ水長が 春枝
入おし是も散りや風仙堂 泉
山川をきりひちる乃石小 眉上
春りり秋の名残やほし 平氏
鶯の妻や忌^葛藤をふけいり 南玉
わらぬ乃あきも初春に仲夏に 雲堂
芭乃実や北よ小集を終り 雲車

一く華表ハ川舟
 のりめり粟刈る
 畚あち拾ふ
 里乃子こま
 同つて是川か
 ぢくもたしる
 友三家乃肖戸
 戎筋ふく時
 をつていこかの茶店



一くくねふか
 完くしてま
 人の考すち
 肉も物いら
 けふのやま
 ぬめらひ
 嶽さけ
 れのこ乃
 かしこ



又

三

出まかりて御坊の山より今朝よりうか
 けしのききし車乃おひきき我より
 中させし御いさし子も一舎衛大城へ
 や入りけりうと同一とおのこ矢ていらへ
 もきけんてい一い極り腰折りあき
 休也

昔乃舞子の海さうめく斗り馬光
 けり来も又さうあえ次

掃除さうあへ本此集りし二つ三つ凡舟

希あもこの草菴乃ありさまむり外
 生ひ茂りて後をかこも桐柳はも散
 きれとふあらくぬれの花はそこ寝る
 未花さうり糸秋のさうき傾ききれ
 さすいふ花をれ花を妙ををひよくら
 乃竹福さく皆法者ともい同なきれ
 浄土のさう花さうり人こそも世の花
 ちらひふまかくし花あうまりとん
 思ふねもあれを記よあう花もか乃

男にいとくろくおして立海も女家あむ橋
切乃こころははらしてらー本母寺（まほ）の
らんや川原も係（か）むる今もこころさハ
こやみろあれたのあれからろーて
あうらばもふお中をえきと寺後へあふ
鴉の誘うけ仔細もあつゝの産乳おれり奥
くさ下ろろろそさう中ももいと長
えののまはかいららうおろり居るさ
喧し鬼角志く舟に向ひ乃地よつ

まー今まこくあつたれらる人のさしあ
らんちろくくにささむろろろ會者定
敵乃おとりりもまのあろろろ知らせて
そくはろり感と信しぬそさろり名
ろあこりくまろろの柳も同らあ
えの

長念佛おれも並ふや小田の原れふ
七（し）子陰り引まぬ是れいふか馬光
院をいさろくの法務よまろく比敷り

登山志 終ひぬるり一先乃法字を好
るるに旧知ちううし味遠乃情誠澄ふ
ぬしあも在まほきぬむまの客殿をくち
ひられく流りやふ小長堤かきりもあく
牛田子亀^位うらうらつき園屋の里目れお
う川いとく次あそくす水々すここの
名み流るるく三返ゆれさぬのふみ
荒川^ももくもくあ笑々も王維々輞川
の佳境^境もかくやハ^有くま家京いとつれ

して畫さんといふ事ぬ一とまよは
よやくくく出く再命をちきりあ門
をま^{ある}あま村かち乃小家何やむ
いとまむ業をさるめつと枝ひれふ
かうこーのねく

くうくくや是も白^白は都鳥馬光
凡ふうつまけいあう我因何をひら
せ神を引く牛頭山う年うぬも白^白
私当に借して茶城雲一風来^{禪カ}禪

活る時紙くわ次る是は道は耳くやち
まこと字もまゝくすまゝくろのりまゝく
かくく信しきまゝくろのぬりまゝく
ひつー乃とりまやとつふ屋くまゝく
はくもや東あうさうぬ末の秋はめ
乃一日の事くろく
まゝく

残真

子住をよ十町はくろくくくくくくくく

乃茶店あうろの茶釜の美なるや
境くくくくくくくくくくくくく
貴人も驚紙くめら連凡驛のやう
も破くくくくくくくくくくくく
くくく

細考ろくくくくくく軒や爺く金 馬光

其角く吉原も近く

園の秋も店ハ茶釜乃月夜ハ 白芥
墨書も人くくくくく茶の海ハ 朝夜

あさきり登吹すれ松の風 舟阿
有ゆや茶釜よあもこるせん 辛糸
船旁乃中にくこぬ茶うまひ 芽蔭

淋しとも麻いぢの怒城間上手 了光
百姓の周果こまゝ 一や海北雨 風壺
藁む 一や掃出を埃の起り 水巴
考もさぬちうり地走れとうち成 練戸

元山を責残 一き新野分が 壺千
淋しこの元乃ほ 一めやこれ川 雲里
木綿と糸車ふ秋もどり 舟ぬ 唯丸
長衣衣やもも草外次茶立虫 英風
常ふとのたをぬ 一て都野の 万棧
畑のふ念も 一りくや面阿の 石樹
招小来よ 一りく 一藝ある 鹿の 後而
その川乃やせめて 一もち 畑年貢 仙阜
抱忽ふまよ 一はく 一更や 鴨の音 友川

それ尊もうきまろや山吹之 釜川
紫乃戸や高のむろり成室とも 席池
秋多や沖忠帆くけし下流き 几多
根忌ぬらんすの徳をぬき理成 一流
初よりちし海 支秋を胡とら 千亮
強くくろ名乗くけてやうろ鳥 夏服
を風連家をおひとむり少の建勢 未山
夕ちくく珠股を秋時めおき成 唐珉
世の秋乃一志室や新河少の 満潮

望人のろきよりむこ紀野分分 洞糸
の系く深浦乃まろしや松の勢 栄之
あさき成阿くひ持る湯成 双寿
葺持やくく進ん虫よりあさろ 山病
刃んれ夏の種もそくく夜長成 削口
高の登るをきれ住家や高焼勢 乱夢
秋風乃まろくをこゆを一紫く成 風舎
七夕ややれ屏風を立ちくく一 輪帆
芥の穂やあめりせぬくよ谷くく 杉月

砂川乃舟れりこそ我夜を水 許人
 月影のあはさけくれば中成 辛葉
 漢火をぬ風う清くて千冬水 芳隣
 高きうも何き心のあはれぬ 黄麦
 細残を去るふよう後一笠の雪 浙江
 木うししの吹すかめそやるれ耳 思玄
 つき障り交りくりや煙の音 飛夕
 ああぬかぬ家城あちう音足成 一光

きんくよ咲く麻おやうる花 馬光
 花れ花を身極ありしむは葉 梅徒
 水多のちとちくあそふ物白糸 如考
 鴨乃すきるうう(や雪れ庭 栢子
 遠くふや揚葉の端も泣れ夢 霍穢
 節遠くし星乃物日やむし時節 銅真
 草の戸やましく寂き記小川焼 謙吉
 夢う進て或取いおうし鐘きく記 孤村
 風う洞子そくきや松と枇杷 陽平

さほく乃世うきおす火許外 豆兩
 引くく夜蒸のまぎや外忠聖 白粒
 濃念や虫うしむりつく十夜撞 瓦暮
 兀下り月も阿さきまれまきふ 奇尻
 菘むのうま居れぬ菘葉 艸跡
 とう毛の板乃あしや神送 芋谷
 ちぶら兀てや山も今物の高 破石
 木くじや研出され 星叶之 露
 鉤下乃神うえつく和豆うふ 隅漱

葱汁をぬのこく老乃丸麻成 維石
 せうまや折うし徳まむ風忠音 琴志
 とうりまや子除とうすく障習ひ 所堂
 のし紙り日々包かして時ぬ免 迂史
 梢をのみふえうきうく落葉成 五寛
 茶のむりねひくくまうみうくお 素蒿
 あく波よりひさのうきて生底嵐 青氏
 奪狩り丸砂くれ乃夕日くね 素舟
 毒刃をまよりん葱の匂ひくれ 悦院

水鳥や下つゝまうに鳴けり 案 眉上
條ありくすゝや露の一時多 去 枝
多しゝや枯き残し 乱れ巻 紫泉
掃くあはれ人あつていひあふる紫小 野道
無乃葉やけをくすあよ水け者 湖南
口切りうきゝ 板を朝日くぬ 田 抱
あうゝゝや吹くゝ動きて山の隈 平茂
ちとくまゆ乃多き所や浪れ者 普舟
清以火の破りうさまよふや小ね時多 海阜

鑑若くそけりなりし身あり る之
聖人うお宿りせりあはれ 南玉
根つゝすれ月夜く乃おけり 雲壺
水仙や一村出来るおおるひ 雲車
風をわく来ぬとれあを鉢を地 る光
蒼よ少くまきんれも降る時面水 風壺
春の風のつゝれく落葉あふ 僕舟
るひあはれ乃種く人標の舟 里山

田十畑とあ〜〜て辛き徳の成 万桂
松風もぬすまの若れさむころぬ 古勇
いろ〜や市乃志くれのあき俵 橋川
くほ〜や中よ三浦乃衣くして 飯月
このち〜やい〜と志進るあよぬ 雲市
口切〜や鼻さねぬ入馬血〜もち 洗車
綿をなす地〜志く〜て枯野^野 菊堂
志く〜やあ〜れ汝子れ徳とも 貞亨
情〜〜よ死〜けりやぬ志〜進 自謙

物言や屯那〜あと成候て又家 赤鳥
障〜〜〜や〜れ〜あけあま〜が 立齋
木〜〜〜や塔乃九輪よ巻〜ぬ 彦城
埋火のま〜ぬ〜おまや小鳥新 如真
門〜〜〜や乃流進〜んて〜ひ 麻山
志〜海やあ〜うす〜〜もあ丸の 松夏
音吹〜もむるまぬ巻目〜と〜 今洞
初言乃お法〜れてみる進〜子 梅屋
葉くけの巨魁〜川不蒲園〜 雨鳥

八景成らふ我もそのや今物乃音 碧々書
 幸さよや琴弾やあくゆりれ去 衆六
 垣くり乃手りくもくや毎の雪 瓜田
 咽りりく所の寐足やあく千鳥 如
 叢り降れ者も極子や押送也 極詩
 老乃身りむく連理のんり我 其友
 喰於乃貝売もろく拈聖く風 伏夢
 寂さひきき音や取明乃飯治屋所 琴願
 又位乃了急風り夜の幸さ我 花里

今物はくり奪れぬ音君のこころ 青汀
 糸掛を野辺くちりきく高野昏 千亮
 升産一川さうちまもあふ花野成 仙臈
 世の中れ奪りもくり路中ぬ 春好
 川風く押せくちりやむく御 欺雪
 空極やあふれ柴火乃うす寂 芝岡

短奇り

眺む

物起るふより子子言れ不不馬光

市忠場糸のさむね糸 竹何

そりよれむき身もも麻麻名名よよ立立て 白芥

籾も持きり糸もも搦搦り 鬼山

日の入るとありも月月いいれれるるここ辛辛葉

伊豆乃山をも唱唱す 枯風 朝霞

秋若る妻よりお撲の迷恨志志いいけけく 扉夕

志んを切切るととははいい麻麻ああぬ 折江

口おおや化されれままいととたたりりおお代 黄菱

魚魚より先へ先残残のううききく 芳隣

美美ををままくく長宗長宗子子元元よよけけりりけん 糸雲

登登るるはは彼彼存存りり入入おおのの子子一一蓑

喜風の折折くく通通れれるる琵琶乃海 舟阿

白眼の助助いいままややいい小眠小眠也 白芥

音音浪浪へへりりそそやや見見ややりり員員明明くく 鬼山

ひやうーのめあしまれ新改 辛紫
狐火を十日乃月思ひてし 新紫
中々ぬ車り舍利よめりてる光
飯次とこ馬やと死柳へ実刻り 芳漢
燐成志まへいあう孔危多 黄菱
かゝ風の身うまゝわらふ年貢船 浙江
とめくあの内一人男子を 龍夕
羨も早のとうぬ京より有付事 采雲
きよいひうんりへあひれ後 一の表

飯

馬光ととあ 漏多
華事屋佛宗の心書
味ふ草如といぬ日旗

後道に流石と云ふ

と云ふは

連中

の言はれ

多し

積尾の

寛任

彫工
并沢啄木

東都書肆

文刻堂西村源六

本町三丁目

